

学会貢献大賞(個人賞)

今回、学会としては初めて、個別論文に対する賞ではなく研究者に対する賞を授賞することになった。対象者は大橋英寿氏である。

大橋英寿氏は1939年生まれ。東北大学大学院を修了後、京都教育大学などを経て、東北大学教授（現在・同大学名誉教授）。氏は自らの立場をフィールドワーク社会心理学あるいはエスノグラフィック社会心理学と位置づけ、多くの後進を育ててきた質的心理学の先駆的存在である。

1975年、沖縄のシャーマンであるユタの「病気治し」に関心をもち、沖縄にてシャーマニズムの研究を開始。沖縄シャーマニズムの世界は一種の病気治療システムを内在させており、地域社会で重要な役割を担っているということを明らかにした。20年間の成果は『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』として1998年に出版され、フィールドワーク研究の金字塔として後進達を導いている。

また、アーサー・クラインマン『Patients and healers in the context of culture: An exploration of the borderland between anthropology, medicine and psychiatry』に関心をよせ『臨床人類学——文化のなかの病者と治療者』として訳書を刊行するなど、心理学を含む質的研究への貢献は大きなものがある。

日本質的心理学会には、設立時から参加。また、その前身的取り組みである様々な関連企画などにも積極的に参加し、日本の質的研究の発展を文字通り全身で支えてきた。日本質的心理学会第7回（2010）においては、大会企画シンポジウム「フィールドワーク：東北フィールド学派の系譜をめぐって」に参加して、東北フィールド学派の中心人物としての大橋氏の業績に改めて光が当てられたことは記憶に新しい。

以上のような大橋英寿氏の長年にわたる学究生活は、貢献大賞を授与するのにふさわしいと考えられる。